

LEVEL  
4

# ロバの皮の女

かわ  
おんな



原作げんさく..  
シャルル・ペロー



朗読音声のダウンロード  
Audio download

## ★読む前に Before you read

### 《多読の読み方》

多読とは、とてもやさしい本から楽しくたくさん読んで日本語を身につけていく方法です。

次の4つのルールを守って楽しく読みましょう。

1. やさしいレベルから読む
2. 辞書を引かないで読む
3. わからないところは、とばして読む
4. 進まなくなったら、他の本を読む



### 《How to do Tadoku》

Tadoku recommends that everyone should start with very easy books and enjoy a lot of them following the 'Four Golden Rules' below.

1. Start from scratch.
2. Don't use a dictionary.
3. Skip over difficult words, phrases and passages.
4. When the going gets tough, quit the book and pick up another.





むかしむかし昔々、「金」という国に王様と王妃様が住んでいました。二人には、美しい王女様がいました。

この王国には変わったロバがいます。金を生むのです。王様は、このロバをとて大切にしていました。

ある日、王妃様が病気になってしまいました。どんな薬を飲んでも、

よくなりません。病気はどんどん重くなりました。

ある日、王妃様は言いました。

「王様、私が死んだ後、私より美しくて優しい

女の人と結婚してください」

王様は大声で泣きました。王妃様は

話し続けました。

「私たちには娘しかいません。私が死んだ

後、王様と新しい王妃様との間に、男

の子が生まれるように祈っています」



話し終わると、王妃様は死んでしまいました。

しばらくの間、王様は泣いてばかりいました。困った家来は、王様に、王妃様が言ったとおり再婚するように頼みました。少し元気になると、王様は美しく、優しい女の人の人を探しました。しかし、いくら探しても、死んだ王妃様より美しく、優しい女の人はいませんでした。

ある日、王様は娘の王女様を見て思わず叫びました。

「そうだ。王女だ！ 王女しかない」

王女様は死んだ王妃様より美しく、優しかったのです。

そこで、王様は、「結婚しよう」と王女様に言いました。

王女様は、びっくりして泣き声で答えました

「お父様、嫌です！ お父様とは結婚することができません」

しかし、王様は考えを変えません。

王女様は妖精に相談しました。

妖精はしばらく考えてから言いました。

「わかりました。王様が結婚をあきらめる

ように、無理なお願いをするのはどうですか。

『美しい空の色のドレスを作ってください』と王様に頼んでください」



王女様は王様に言いました。

「私と結婚したければ、私のために、

びつくりするぐらい美しい、空の色の

ドレスを作ってください」

王様は家来にドレスを作るように

言いました。

次の日、びつくりするぐらい美しい、

空の色のドレスができました。王女様は

そのドレスの美しさを見て困りました。



王女様は、もう一度妖精に相談しました。

妖精は言いました。

「そうですか……。それでは今度は、今までにないくらい美しい、月の色のドレスをお願ひしましょう」

王女様は、王様に頼みました。

「空の色のドレスよりも美しい、月の色のドレスを作ってください」

次の日、本当に美しい月の色のドレスができました。

妖精は、悲しそうな王女様を見て言いました。

「それでは、今度は、空の色と月の色のドレスよりも、もっともって美しい、太陽の色のドレスをお願ひしましょう」

しかし、今度もまた、空の色のドレスよりも月の色のドレスよりも、何倍も美しい、太陽の色のドレスがで上がったのです。王女様はとても悲しくなりました。



妖精は、しばらく考えてから言いました。

「本当に王女様と結婚したいなら、王様が大切にしている金を生むロバを殺して、その皮を持ってくるように頼みましょう」  
妖精は、王様は金貨を生むロバを殺すこと



はできないだろう、と考えたのです。

「王様がそれでもあきらめなかったら、そのロバの皮を着て、金王国から逃げてください。この私の魔法の杖をあげます。汚い姿になっても、この杖を使えば、あなたの美しいドレスやアクセサリで、いつでももう一度着飾ることができるので、安心してください」

そこで、王女様は王様に頼みました。

「金貨を生むロバを殺して、その皮を私にください」

すると、王様は、どうしても王女様と結婚したいと思っていたので、大切にしていたロバをすぐに殺し、その皮を持ってきました。

王女様はロバの皮を着て、自分の顔を汚しました。

そして、王国から逃げ出しました。  
家来たちが国中を探しましたが、王女様を見つけることはできませんでした。



王女様は、遠い「愛」という国

まで逃げました。そして、ある農場で、豚の世話をする仕事を見つけました。顔が汚すぎるし、ロバの皮を着ていたので、王女様に話しかける人はいません。そして、みんなは、王女様を「ロバの皮の女」と呼びました。

何か月も経ったある日、ロバの皮の女は、泉の水に映る自分の顔を見ま

した。とても汚い顔に、自分でびっくりしました。次の日は村の大きなお祭りです。ロバの皮の女は、泉の水で体を洗いました。それから、自分の部屋に戻り、妖精の魔法の杖を使って、空の色のドレスを着ました。ロバの皮の女は、とても美しい王女様になりました。

お祭りの日、愛王国の王子様が農場を通りかかりました。そして、農場のはずれの、汚い小屋の窓から、この美しいドレスを着た女の人を見かけました。王子様は、この女の人があまりにも美しいので、びっくりして、農場の人たちに聞きました。

「小屋にいる女の方は、どういう方ですか？」

農場の人たちは言いました。



「ああ、ロバの皮の女ですか？ 汚い豚飼いの女ですよ」

王子様はそれを聞くと悲しくなりましたが、城に戻ってからも、ロバの皮の女のことを忘れることができません。とうとう病気になるしました。母親の王妃様はとても心配して、医者におすこ息子を治してほしいと頼みました。しかし、王子様はなかなか治りません。恋の病気だったからです。

王子様は言いました。

「ロバの皮の女にケーキを作ってもらってください。それを食べたなら、きっと元気になるからです」

ロバの皮の女は、自分の手作りケーキを

王子様が食べたいと言っていると聞いて、

とても喜びました。実は、王子様が

ロバの皮の女を見かけた時に、

ロバの皮の女も王子様を見て、

王子様のことが忘れられなくなっていたのです。

ロバの皮の女はケーキを作り始めました。しかし、ケーキを作っている



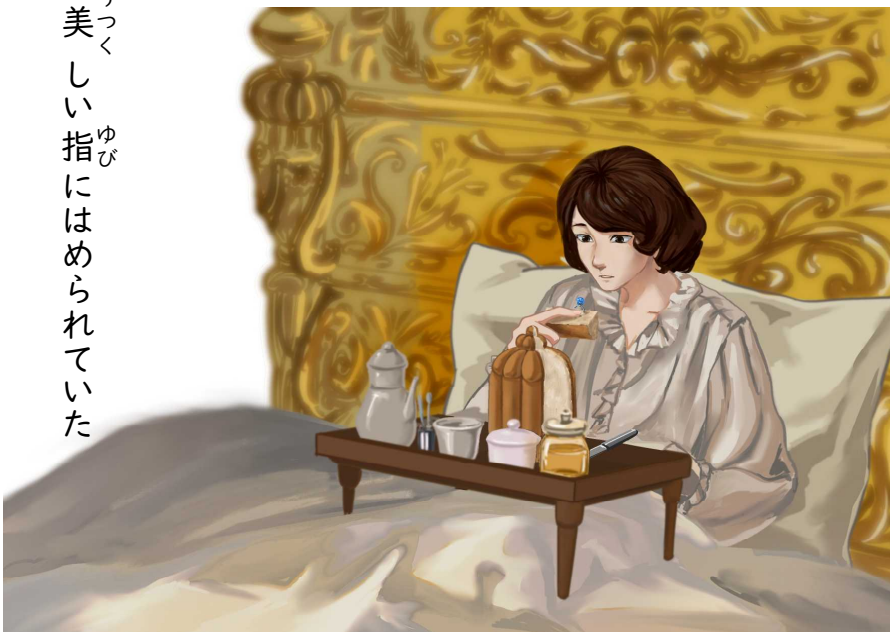
途中とちゅうに、気づきかずにケーキきの生地じに  
指輪ゆびわを落おとしてしまいました。

ロバろばの皮かわの女おんなはケーキケーキを家来けらいに  
渡わたしました。

王子様おうじさまがケーキケーキを食たべ始はじめると、  
口くちの中なかで「カチツカチツ」と音おとがしました。

それは、指輪ゆびわでした。王子様おうじさまはその  
指輪ゆびわを見みて思おもいました。

——これはきつとあの人ひとの指輪ゆびわだ。あの美うつくしい指ゆびにはめられていた



指輪ゆびわに違ちがいない——

そして、指輪ゆびわを枕まくらの下したに隠かくしました。

王子様おうじさまの病びょう気がきなかなか良よくならないので、王様おうさまと王妃様おうひさまはとも心配しんぱい  
しました。そして、泣なきながら言いいました。

「早はやく元げん気きになっておくれ。元げん気きになったら、王子おうじの好すきな人ひとと結けっ婚こんさせてあげ  
るから」

それを聞きいてうれしくなった王子様おうじさまは、枕まくらの下したから指輪ゆびわを取とり出だして言いいまし  
た。

「この指輪ゆびわがぴったり合あう女じよ性せいと結けっ婚こんしたいです」

王様おうさまはそれを聞きいてすぐ、王子様おうじさまは指輪ゆびわがぴったり合あう人ひとと結けっ婚こんする、と



国中に知らせました。すると、国中の女の人が、その指輪をはめるためにお城にきました。でも、だれにもぴったり合いませんでした。

王子様は、

「ロバの皮の女は指輪をはめてみましたか？」

と聞きました。すると、家来は笑いました。

「え？ あのロバの皮の女ですか？ あんなに汚い女も呼ぶんですか？」

しかし、王様は家来に、ロバの皮の女を迎えに行くように言いました。

王様の家来がロバの皮の女を迎えに行きました。ロバの皮の女は美しいドレスの上にロバの皮を着て、王子様に会いにきました。王子様はロバの皮の

女が、とても汚い姿だったので、がっかりしました。

——どうして、前に見かけた女の人と違うのだろう——

ロバの皮の女は指輪をはめてみました。すると、指輪はロバの皮の女の指にぴったり合いました。そして、ロバの皮がすりと落ちて、美しい王女様が現れました。

「ああ！」

そこにいた人たちはみんな、とてもびっくり



りしました。ロバの皮の女は本当は美しい王女様だったので。  
その時です。

突然、妖精が馬車に乗って現れました。

そして、どうして金王国の王女様が

ロバの皮の女になったかを

みんなに話しました。



王子様は王女様と結婚することになりました。しかし、王女様は金王国の王様の許しをもらわなければ、結婚できません。王子様は二人の結婚式の招待状を金王国の王様に送りました。

金王国の王様は結婚式にきました。

王女様が愛王国に住んでいる間に、王様は美しくて優しい女の人と結婚していました。そして、その新しい王妃様は男の子を生んでいました。

結婚式で王女様に会った王様は、娘と結婚しようとしたことをあやまりました。

## シャルル・ペロー Charles Perrault

(1628 ~ 1703 年)

フランスの詩人。ヨーロッパに伝わる話を集めて『ペロー童話集』としてまとめました。

『シンデレラ』(にほんご多読ブックス Vol.2 収録)をはじめ、『長靴をはいた猫』や『青ひげ』などが有名です。

王女様と王子様の結婚式はとて  
もすばらしかったです。お祝いは三か月  
続きました。

そして、王女様と王子様は長い間、  
愛王国で幸せに暮らしました。





NPO多言語多読

tadoku.org



この作品はクリエイティブ・コモンズ表示-非営利-改変禁止4.0国際ライセンスの下に提供されています。

This book is licensed under CC BY-NC-ND 4.0

<https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/>

かわ おんな  
ロバの皮の女

発行日：2024年10月15日

原作：シャルル・ペロー 『ロバの皮 Peau d'Âne』

簡約：ロイス・メナン

挿絵：Jiao Jing

監修：NPO多言語多読